

プラサンナパダーの引用經典(一)

——特に Samādhirājasūtra にひきつ——

八 力 廣 喜

プラサンナパダー(以下 Pr.)に引用されている諸經典のうち、シクシャヤサムッチャヤ(以下 Sik.)にも引用されている經典についてみると二十一種⁽¹⁾にものぼり、この時代に中觀論書が依用する大體の經典を識別することが出来る。それらのうち、今回は、Pr.に於いて引用回数ひは最も多く、Samādhirājasūtra(以下 Sr.)を取りあげ、Pr.に於ける引用部分の問題點を考へてみることにしたいと思う。

まず、最初に Sr.の引用されている Pr.の章、頁數、それに相當する Sr.の章、偈のナンバを列擧すれば次の様になる。

- ①第一章(四四) Sr. 七章五偈、②第二章(一〇八—一〇九) Sr. 九章九、十偈、同章(一〇九—一一一) Sr. 二十九章三—十九偈、③第四章(一二八) Sr. 十二章七偈、十一章十三偈、④第五章(一三五—一三六) Sr. 九章二十七、二十八偈、⑤第六章(一四三) Sr. 九章最初の長行、⑥第七章(一七八—一七九) Sr. 九章十七、十八、二十九偈、⑦第九章(二

〇〇—二〇一)②に同じ(ただし、Sr. 二十九章の部分に相當するが、そのうち不明偈がある)⑧第十二章(一二五—一二六) Sr. 三十七章三十四—三十六偈、三十偈、⑨第十五章(二七六—二七八)①に同じ、三十八章十一偈、不明偈、八章—一五偈、⑩第十六章(二八九) Sr. 三十八章七十、九十一偈、⑪第十七章(三三—三三三) Sr. 十章三十九、四十一、八十七、四十二偈、⑫第十八章(三五四—三五五)⑧に同じ(三十五偈)⑨に同じ(四、五偈)⑬第二十一章(四二七)梵文拔、同章(四二九) Sr. 十三章十六偈、⑭第二十三章(四七二) Sr. 九章九、十偈、同章(四七一—四七四) Sr. 十四章二—六偈、六章十二偈、⑮第二十六章(五四九—五五〇) Sr. 二十九章十三 a、d、十五 a、b、十六偈、九章七、十七偈、となつており、Pr.全體にわたつて引用されていることが知られる。しかし、Pr.の引用部分と Sr.の梵文とを比較すると①、Pr.の引用部分と現存原典との間には異同が極めて多く、②、從つて、

現存諸寫本と月稱参照の梵本との關係について示唆される點がある、ということが明らかとなる。以下、これらの點について検討を試みることにしたい。

まず、第一番目の問題について見ると、Pr. 及びギルギット本、ヴァイドヤ本、フサンのノートとの間には殆んど枚舉にいとまのない程異同が見られることである。こゝで、私は校訂を目的ではないので、その異同を例示することにとらめ、②の問題の所で異同による寫本の關係を見たい。さて、Pr. に引用の Sr. 九章九、十偈は次の様になっている。

ādarśapīṭhe tatha tailpātre nirikṣate nārmukhammalamb-
rītaṁ / so tatra rāgaṁ janayitva bālo pradhāvito kāmī
gavesamāṇo // (9)

mukhasya samkrānti yadā na vidyate bimbe naiṣva kadāci
labhyate / mūḍho yathā so janayeta rāgaṁ taḥo' pamān
janatha sarvadharmān // (10)

以上が Pr. の引用部分であるが、ヴァイドヤ本(V)は mukhaṁ svalankṛtaṁ ギルギット本(G') のうちにはギルギット寫本(C') とネパールより、H・P シャーストリ蒐集の A'、同じくネパールより、ホジンの蒐集の B がある。C, nāri alankṛtaṁ mukham. A, nāri B, mukham alankṛtaṁ. G, mukhaṁ svalankṛtaṁ また、フサンはノートで mukhamam となるのはミーターの關係であるとしている。また、V, G,

sā……bāla pradhāvita kāma gavesamāṇa A, sa……bā-
lah pradhavitah kama gavesamāṇah ㊦ V, G, yathā
sa mūḍho フサンのノートは mūḍhā yathā'ite janayaniti
となつてゐる。また、V, G, A, B, janatha が C, janatu となつてゐる。以上の如き異同は一例にすぎず Pr. の Sr. 引用部分の殆んど全箇所にあたつてゐることが知られる。こゝでは紙数の關係もありこれだけにとらめたいと思う。さて、この問題の解決には、Pr. の藏譯、Sr. 諸寫本、及び漢藏譯等の参照が必要であることは勿論のことであり、更にミーターの考慮も忘れてはならないことであるが、今はそれが目的ではないので用例を示すだけにした。

次に第二番目の問題について、特に Pr. 第二章に引用されている Sr. 二十九章十三—十九偈についての疑問にしばらく。V 本、G 本の二本によれば A には十四偈の後に次の様な偈が附加されている。

supinopamaṁ hi tribhavasikam laghu
bhagam anityatam āyatanam /
na ca āgatam na vā ihā' pagatam
śūnyānimitta sada santatiyo //

これが Pr. では多少の亂れは示しているが、V 本、G 本の十七偈と十八偈との間に相當する部分に挿入されている。また Pr. では第九章にも Sr. 二十九章十三—十八偈までが引用

されているがAに見られた偈は引用されていない。さて、この事實をどう考えたらいいかという疑問である。まずP. 第九章には何故附加偈がないかということについては、月稱のこの經典の意圖を考慮にいれるなら、多少の解決の糸口が與えられるかも知れない。P. 二章では去來不可得の教證として引用し、九章では取者ブドガラ不可得の教證としてこの經を引用している。また附加偈の譯は「三有は夢と等しく、實なるものなし。速かに壞失して無常なること夢の如し。來ることもなく、こゝより去ることもし。諸相續は常に空にして無相なり」(山口博士譯による)というもので、むしろ第二章の内容とよく一致するものである。従つて、月稱はP. 第九章ではこの附加偈を意識的に抜かしたと考えられないこともないが、これは、あくまでも推論の域を出ないものであり、何故第九章に附加偈が引用されていないかといふ疑問に答える理由としては十分ではないことは明らかである。たゞ、月稱の時代にはAの系列に入る梵本が既に流布していた、ということは言えると思うのである。

ところで、山田龍城博士「梵語佛典の諸文獻」⁽⁴⁾に於けるS. の解説には「レガメイによれば現存ネパール梵本はチベツト譯とよく一致するが漢譯十卷本よりは増廣されているので、七―九世紀の間に現形が成立したものと考えられる。これに反し、ギルギット梵本には散文の増廣部分が見られず那

連提耶舍譯と一致するので、ダツトはギルギット本は五―六世紀に成立していたと述べている。」とある。因みに漢譯十卷本のこの部分は、梵文と内容も殆んど一致するが、確かに先に述べたAの附加偈に相當する譯は見當らない。また、十三偈から十九偈にいたるP. 二引用部分とV本、G本との間には、多少の異同をのぞいては、附加偈に見られる様な寫本系列を暗示する有力な特徴はないのである。

更に、漢譯十卷本とP. の引用部分との關係を見ると、注目すべきことは、S. 九章の引用偈は最初の長行の部分、七、九、十、十一、十七、二十七、二十八偈であるが、長行は漢譯とよく一致するにも拘らず、偈はかなり相違が見られることである。このことはすでに山口博士が指摘されておられるが、その部分のみならず、他の偈に於いても相違していることが知られる。これはむしろ、S. 九章に於ける成立、流布、増廣に關連する問題⁽⁷⁾なのでここでは觸れないが、P. 二引用偈のうち、漢譯と最も一致しないのは、この第九章である。

さて、ネパール梵本がレガメイの言う如く、増廣されたものであるとすれば、その現形成立の過程を論ずるには、S. 全章から最も古い形を抽出するという操作⁽⁸⁾が必要であり、引用偈についても、早急に結論を出すことは出来ない。しかし、P. の引用部分に於いてAに見られる偈がされていることは、

「七—九世紀の間に成立した」というレガメイの主張と、月稱の活躍年代と漢譯者那連提耶舍の翻譯年代（五五七年）から、ネパール本の成立年代の幅に疑問をさしはさむ餘地がないわけではないと思われる。

また、Sr. の經名について、東北目錄 (No. 127) には *Sarva-dharma-svabhāva-samatā-vipaṇcitā-Samādhirāja* とあるが、*Mahāvīyutpatti* には、單に *Samādhirāja Śik* には *Candrapradīpa* (同一作者の *Bodhicaryāvatāra* へ同く) となっているのに對し、Pr. 第十六章、第二十一章には、*Samādhirāja bhāṭāraka* という名稱が出ており、はたして、月稱の時代に於いて、經としてこの様に呼ばれていたのか、月稱が自ら命名したものであるかについては不明である。しかし、以上にあげた如く、多くの名稱があることは、かなり廣く流布していた經典であることを物語っている。従つて、諸寫本の系列に關して、まだ疑問の餘地があると考えられる。

以上、Pr. 引用經典のうち Sr. について問題點を指摘したのであるが、Sr. は月稱活躍時期には、かなり流布していたことが判明する。Sr. の場合の様に、引用經典に對する整理は、梵本成立、流布の過程に對して、結論を與える程の力はなくとも、何らかの示唆が與えられるという意味で必要なのであると思う。

最後に、Pr. 九章、十五章の不明處についての問題が残つ

たが、これについては別の機會にしたいと思う。

- 1 インデックス (Pr. p. 625) 以下、及び *Śikṣasamuccaya* (Ed. by C. Bendall 1902) p. 367 以下参照。

2 使用したテキストは

- ① P. L. Vaidya, *Samādhirājasūtra*, *Buddhist Sanskrit Text*-No. 2 1961.

- ② Nalinaksha Dutt, *Gilgit Manuscripts Vol. II*, 3 Pts. 中論釋 (一) 一七九頁

- 4 山田龍城博士「梵語佛典の諸文獻」一〇三頁参照

- 5 大正一五、五八七頁 C、三行目—十六行目。

- 6 中論釋 (II) 一二四頁の註を参照。

- 7 Sr. 九章の引用部分は大正一五、五五七頁 A から五五九頁 A 迄の部分に相當していると思われる

- 8 第十六回印度學佛教學會に於いて、東北大學の平野真完氏の「*Samādhirājasūtra* の本文發達について」という發表を開く機會を得て、大變參考となつた。發表によれば、年代的には、那連提耶舍譯とチベット譯 (八〇〇年) との間に *Śik* 及び Pr. の引用部分が入るとされている。

- 9 中村元博士「インド思想史」によれば、六五〇年頃とされている。

- 10 Sr. は *Śik* にもかなり多く引用されているのであるが (例えば *Śik* 十七、十八、五十三—五十四、一〇〇—一〇一頁等々) Pr. 引用部分と同一箇所引用は見當らないので、比較出來ない。